

いじめ防止IoT デバイス開発のための オンラインツール活用型ワークショップの実践

久保 順也¹, 斉 暁², 今野 卓哉³, 野澤 令照⁴

¹宮城教育大学大学院高度教職実践専攻 (教職大学院), ²イフティニー株式会社

³東北インフォメーション・システムズ株式会社, ⁴宮城教育大学

概要：児童生徒間のいじめの早期発見・介入を実現するにあたり、いじめ被害者が支援要請の声をあげやすくすること、及びその声を周囲が受け止めやすくすることが課題となる。本実践では、情報技術の活用を通じてこれらの課題克服の実現を目指して、いじめ防止を目的としたIoTデバイス開発に向けて、オンラインのホワイトボードツールである Miro とウェブ会議システム Zoom を活用したワークショップを複数日に渡って開催した。コロナ禍のためオンライン開催であったが、上記のツールを活用することによって問題なく開催できただけでなく、オンラインツールならではのメリットも得られた。

キーワード：いじめ防止, IoT デバイス開発, オンラインワークショップ, Miro

1. はじめに

文部科学省(2021)によると、令和2年度の児童生徒間のいじめ認知件数は51万7,163件(国公私立小・中・高等学校・特別支援学校)であり、前年の令和元年度の61万2,496件よりも10万件近く減少した。これは、新型コロナウイルス感染拡大による一斉休校で授業日数が減り、部活動が制限されるなど児童生徒間のコミュニケーションが減少したこと等がその要因とみられている(時事通信社, 2021)。いじめ認知件数が減少したことは一見望ましいことのようにみえるが、同調査の中では、「パソコンや携帯電話で誹謗中傷される」いじめ、いわゆるネットいじめは過去最多の1万8,870件となっている。こうしたネットいじめ、とりわけSNSで発生するいじめは周囲の大人に気づかれにくく、発見が困難であるため介入も遅れ、深刻な被害に至ることもある。このように、認知されにくいネットいじめの増加は、教育現場におけるいじめ対応の困難さにも繋がっている(例えば、久保, 2016)。

いじめが発生した際に、被害者自身がその被害を周囲に相談したり告白したりできれば、比較的早期にいじめが発見されて解決に至ることが期待できる。しかし実際には、いじめ被害者は様々な理由からその被害を他者に相談できなかつたり、自分自身のいじめ被害

の事実を認められなかつたり、被害を隠蔽しようとすることがある。例えば久保(久保, 2018)は、小学生が関係性いじめ被害を受けた際にその被害を隠さず教員に相談するかどうかを調査し、規範を遵守しようとする意識の低い児童ほど「問題悪化を恐れて」「友人関係維持のため」「相談行為自体のデメリット」および「被害の否認」によって、いじめ被害を隠蔽することを示唆している。こうした児童らへの支援として、教員に対していじめ被害を申告したり援助要請しても問題悪化等の二次被害が生じない支援体制を保障する必要があると考えられる。また本田(本田, 2017)は、援助要請の心理状態のアセスメントモデルを提唱しており、援助要請をしない、すなわち「助けて」と言わない(言えない)心理状態を「困っていないから相談しない」「助けてほしいと思わないから相談しない」「助けてと言えないから相談しない」と分類し、それぞれに対する指導・援助のあり方を検討している。このうち「助けてと言えないから相談しない」心理状態は、相談についての期待感よりも抵抗感の方が強いことが影響しているため、期待感を高め、抵抗感を低めるように援助することが必要であり、抵抗感を具体的に聞きながら、そのような悪い予感が実現しないような環境を整えることが提唱されている。

このように、いじめの早期発見および解決においては、被害者自身による援助要請がしやすい環境を構築すること、また周囲の支援者がその援助要請をキャッチしやすい環境を構築することが課題となる。こうした環境構築のために、児童生徒自身がいじめ被害を受けた時に適切に援助要請ができるよう訓練する「いじめの避難訓練」も提唱されており(高橋・小沼, 2018)、人的環境への予防的介入として有効なアプローチだが、並行して物的環境からのアプローチもまた検討の必要があると筆者は考える。つまり、ICT等のテクノロジーを活用して、いじめ被害者が援助要請しやすい環境を構築することができると思う。

上記の問題意識から、本論文では、IoT (Internet of Things, モノのインターネット) の技術を用いて、いじめ被害者が援助要請をしやすく、あるいは周囲の支援者がその援助要請を受け止めやすくできるのではないかと発想から、大学と民間企業、および行政との連携の下、いじめ防止のためのデバイス開発を目的として筆者らが行ったワークショップ実践について報告する。ワークショップ形式としたのは、研究者やデバイス開発者だけではなく、教育現場の実態を知る現職教諭や、いじめ対策および相談事業を担う行政職員らと一緒に討議することで教育現場の実態を把握した上で、児童生徒や教員のニーズに即したデバイス開発を行うことが可能になると考えたためである。また、今回のワークショップ実施にあたり、新型コロナウイルス感染症緊急事態措置下のため、ウェブ会議システム Zoom によるオンライン討議、およびオンラインホワイトボードツール Miro によるオンライン上でのアイデア検討・共有作業を実施したため報告したい。

2. これまでの経緯

宮城教育大学は、2015年度より上越教育大学・鳴門教育大学・福岡教育大学と共同で「BP (いじめ防止) プロジェクト」を始動させ、各大学の特色を活かしたいじめ防止活動に取り組んできた。各大学は毎年各地でいじめ防止研修会を開催し、教育関係者や学生、一般向けにいじめ防止に関する情報発信を続けてきている。2019年11月に本学が実施したいじめ防止研修会に第二筆者が参加し、第一筆者と知り合うことになった。当時、第二筆者はIT関連企業のエンジニアであったが、仙台市で立て続けに発生した中学生のいじめ自

死事案に心を痛め、いじめ予防に何か寄与できないかとかねてより検討していたところであり、第一筆者宛にいじめ予防のための共同研究について相談を持ちかけた際に上記の研修会を紹介され、繋がりが生まれたのであった。翌月12月より、AIやIoT等の情報技術を使いたいじめ防止についての共同研究を進めることについて第一筆者と第二筆者とで合意し、後に第三、第四筆者も参加して現在まで定期的な研究会を重ねてきている。

2021年度に筆者らは、いじめ防止を目的とする産官学のネットワーク構築を目指して、「仙台いじめ防止ネットワーク」の立ち上げに向けた準備委員会を設立した。このネットワークを、いわばいじめ防止活動のためのプラットフォームとしたいという構想であり、その中の一プロジェクトとして、いじめ防止のためのIoTデバイス開発研究を位置付けている。これまで、このデバイス開発のために筆者らはアイデア検討を重ね、また教職大学院の現職教諭院生にも意見を聞く機会を設ける等、教育現場での実用化に向けて取り組んできた。今回、より多くの参加者の意見やアイデアをデバイス製作に反映させるため、より広い範囲に声をかけてアイデア生成のためのワークショップを開催することになった。その際に、行政の立場からの参加者を得るべく、仙台市子供未来局いじめ対策推進室にも参加を呼びかけ、市職員のワークショップ参加も得られた。

以下は、2021年8月から9月にかけて実施した、このワークショップの実践記録である。

3. ワークショップについて

①ワークショップの趣旨

いじめ防止を目的とするIoTデバイスの開発にあたって、どのような目的に焦点を絞るかが初期の課題となった。いじめという現象は多様な要素が絡む複雑な事象であり、その予防においても多様な観点や介入方法があり得る。今回のワークショップにおいては、いじめの被害者が自ら支援を求めることが難しいという点、つまり「被害者が声をあげにくい理由は何か」をまず一つのリサーチ・クエスチョンとすることとした。また、周囲の子どもや大人の側も、被害者からの援助要請に気づかなかつたり、見て見ぬ振りをしてしまったりすることがあり得る。こうしたことを「被

害者の声を受け止めにくい理由は何か」として二つ目のリサーチ・クエスチョンとした。

ワークショップでは、上記のリサーチ・クエスチョンから討論を開始し、その結果を「なぜなぜ分析」の手法でマインド・マップ状にまとめ、根本要因となるものを探る。その後、その根本要因を克服するための手立てについて討論し、アイデアを創出することを狙った。

②ワークショップの参加者

ワークショップ開催にあたり、第二筆者はワークショップのファシリテーターとして各回の司会進行を担当し、かつ会全体の事務局役を務めた。他の筆者三名はそれぞれ一参加者としてワークショップに参加した。

上記の他、本学教職大学院の大学院生7名(現職教諭6名、ストレートマスター1名)、学部4年生1名、第三筆者と同じIT関連企業の社員2名、仙台市子供未来局職員2名が参加した。

③ワークショップの形式および使用したオンラインツール

2021年8月20日より、宮城県も「新型コロナウイルス感染症緊急事態措置を実施すべき区域」に指定された(内閣府, 2021)。当初、ワークショップは対面により実施する予定であったが、上記の状況により計画変更を余儀なくされた。オンラインのワークショップ開催に形式を変更するにあたり、いくつかのオンライン会議システムを候補に挙げて検討したが、筆者らが最も使い慣れているZoom社のZoomを採用することとした。

また、オンラインでアイデア創出・共有・記録をするにあたり、オンラインホワイトボードツールであるMiro社のMiroを採用した。Miroは、Andrey Khusid氏が2011年に開発したツールであり、機能に制限があるものの無料で使用することができる。(Miro, 2021)。会議やワークショップ、ブレインストーミング等、様々な用途に活用でき、複数のメンバーが同時にアクセスしながら共同で編集作業を行うことができる。同種のツールにはGoogle社のJamboardがあるが、Miroのほうがより広大なキャンバスを利用でき、またマインドマップ等のテンプレートが事前に用意されているため、すぐに作業を行うことができるメリットがある。

Miroを利用するためにはアカウントを作成するか、Google等の外部サービスのアカウントと連携する必要がある。またパソコンにアプリケーションをインストールする必要がある。仙台市子供未来局から参加するメンバーは、市の規程により個人のアカウントを職務で使用することができず、また市役所の端末にアプリケーションを新規にインストールすることもできないことから、Zoomの画面上でMiroのウインドウを画面共有して閲覧しながら作業に参加した。

④ワークショップの日時・期間

2021年8月27日はワークショップの初日としてキックオフイベントを開催した。運営事務局より、ワークショップの趣旨(上述)、今後の予定等についてアナウンスした後、いじめ問題の現状と特徴についての基本的理解を参加者間で共有するために、第一筆者が講義を行った。その後の日程では、9月2日、3日、7日、10日を「①問題の掘り下げ」、14日、16日、21日、30日を「②アイデア出しと優先順位の検討」という二つのパートに分けて、全体で約1ヶ月間にわたり、初回を含め全9日間の日程でワークショップを実施した。当初の予定では9月21日までの日程で全てを終える予定であったが、①問題の掘り下げにおいて予定よりも多くの討議時間を要したため、9月30日を追加することになった。参加者は各々の都合により参加可能な回に参加した。

4. ワークショップの経過

①問題の掘り下げ(2021年9月2日・3日・7日・10日)

2021年9月2日よりワークショップを開始した。最初に自己紹介、アイスブレイクを行い、検討作業にあたり「積極的に発信すること」「他の人の考えを受け入れること」等の対話のルールを確認した。その後、まずは「いじめ被害者が声をあげにくい理由」について考えていくにあたり、「声をあげにくい」の逆の状態である「声をあげやすい理想的な状態」を具体化することを参加者に求めた。Miroのキャンバス上にワークシートを作成し、「誰が」「どのような集団で」「どこ」「いつ」「何を」と項目を設けて、「子供にとって理想の姿」「教師にとって理想の姿」「保護者にとって理想の姿」「行政にとって理想の姿」とそれぞれの

立場における理想的な状態を明確にすることを目指した (Figure 1)。各自がアイデアを書き出した後に討論を実施した。その後、上記と同様の手続きで「(いじめ被害者の) 声を受け止めにくい理由」について考えるにあたり、逆の「声を受け止めやすい理想的な状態」を具体化する作業を行い、現状と比較してギャップを顕在化させる作業を行った (Figure 2)。

その後、上記の作業で明らかにした「理想と現状のギャップ」について付箋に書き出した上でカテゴリごとに分類した。例えば、『いじめは悪』と感じていても、心理的な要因や友達関係など、自分の身を守ろうとする意識から、当事者意識を持たないようにしている子がいるのではないかと「共感できることや、共感した結果行動を起こすことができると良いが、現実にはできていないことが多い」等の意見を集約してカテゴリ「当事者意識の構築」が生成された。

続いて、「いじめ被害者が声をあげにくい」「いじめ被害者の声を受け止めにくい」現状に大きな影響を与えている要素について、参加者各自が付箋に書き出して共有した。例えば、「不安だから」という要素が挙げられ、その理由として「傍観者・被害者ともに『次が自分になるかもしれない』『これ以上ひどくなるかもしれない』など、どれも自分が置かれる状況が悪くなることを不安に思っていると感じた。また、行動したところで好転するような成功体験があれば良いが、その経験があまりにも少ない(ない)ため、不安を拭うことはできないと考える」といった意見が共有された (Figure 3)。

ここまで挙げられた要素を元に、「なぜなぜ分析」が行われた。「なぜなぜ分析」は、ある問題の背景にある要因を提示し、またその要因を引き起こした要因を提示していくことによって、問題の根本原因を発見するための分析手法である。いじめ被害者が声をあげにくい、また声を受け止めにくいという問題の背景にある根本原因を、この「なぜなぜ分析」で掘り下げていくことによって明らかにしようと試みた。分析にあたり、Miroのマインドマップ作成機能を用いて作業を行った (Figure 4)。

なお「なぜなぜ分析」の作業にあたり、挙げられる要因が多種多様にわたっており、全貌を把握することは非常に困難と思われたことから、途中から問題を「被害者が不安だから教員に声を上げにくい」に絞って分

析を実施することとなった。

②アイデア出しと優先順位の検討 (2021年9月14日・16日・21日・30日)

先の「なぜなぜ分析」で、いくつかの「根本原因」まで掘り下げたが、特に重要と考えられる三つの「根本原因」を検討対象として選出した。この三つとは「自分がいじめの対象になるから」「浮いていると思われたいから」「先生に相談するメリットがないから」であった。これらを更に具体化するため、「どんな対象(学年や立場)をターゲットとして介入すればよいか」を参加者全員で討議した後、投票で絞り込んだ。

続いて、三つの「根本原因」を解決するために上記のターゲットに介入するアイデアを出す作業を行った。ブレインストーミングの手法を用いて、制限時間内に参加者各自が思いついたアイデアをどんどん付箋に書き出してMiroに貼っていった。各付箋には「アイデアの対象の原因(先述の三つの「根本原因」のうち、どれを対象にしたのか)、「ターゲット」(介入対象として想定する校種や学年)、「アイデアを一言で言うと」(アイデアの内容を端的に表現したタイトル)、「氏名」(付箋を書いた参加者名。個人名のためFigure 5では削除)を記載している。アイデアが出尽くした後は、「便乗したいアイデア」や「コラボしたいアイデア」に別の色の付箋を貼って行ってアイデアの拡張を狙った (Figure 5)。これらの作業が終わったところで、星形の付箋を用いて投票を行い、実現したいアイデアを選出した。同様の手続きを「いじめ被害者の声を受け止めにくい理由」についても実施した。

5. ワークショップの成果

一連のワークショップを通じて、いじめ被害者が「声をあげやすく」、また周囲の者が「声を受け止めやすく」するためのアイデアが多数創出された。例えば、子どものメンタルヘルスの状態をモニタリングする装置や、フローチャートを用いて適切な相談先まで子どもを導く仕組みづくり等、多様なアイデアが提示され、そのうち優先的に実現したいアイデアが多数決によって数個選出された。現在、これらのアイデアの実装に向けてデバイス開発を進めている途上であるため、各々のアイデアの具体について詳述することは

子供にとって理想な姿

誰	どのような集団 (学級・部活動・友達グループ等)	どこ (登下校中・SNS等)	いつ	何を
1 傍観者が	子どもが属するすべての集団において	全ての場所において	いじめ行為を見られたら	その場で自分自身を助けてもらえることである
2 被害者が	子どもが属するすべての集団において	全ての場所において	いじめられたら	他の子どもが声をあげてくれる
3 傍観者が	子どもが属するすべての集団において	全ての場所	いじめられたら	すぐに相談できる体制がある (フロンチャートで相談先を導く)
4 被害者が	子どもが属するすべての集団において	全ての場所	いじめられたら	いつでも、どこでもチャットなどSNSやアプリで匿名で学校に相談できる
5 傍観者が	子どもが属するすべての集団において	全ての場所	いじめ行為を見られたら	いつでも、どこでもチャットなどSNSやアプリで匿名で学校の相談員に相談できる
6 傍観者が	子どもが属するすべての集団において	全ての場所	なんとなく嫌な感じしたら (いじめに陥らず)	たくさん相談員の中から子どもが相談先を選んでもらえる
7 傍観者が (いじめられた子) が	子どもが属するすべての集団において	全ての場所	嫌な感じになっている時	いじめに相談するが、匿名にしたい
8 被害者が	子どもが属するすべての集団において	全ての場所	いじめ行為をした時	自分がいじめ行為に加わって、自分が行方を止められる
9 子ども全員が	子どもが属するすべての集団において	全ての場所	学校生活を楽しくとき	お互いの個性性、個性を認める環境を築くこと。(自分と合わない、一緒に居たくない存在と距離を置いたりしない環境を築ける環境)

Figure1 「子供にとって理想の姿」のワークシート (抜粋)

現状

誰	どのような集団 (学級・部活動・友達グループ等)	どこ (登下校中・SNS等)	いつ	何を (最も事態が深刻な時期を想定 (例: 小学校5、6年生など))
1 傍観者が	子どもが属するすべての集団において	学校で	いじめ行為を見られたら	その場で声をあげてもらえることが少ない (中学)
2 被害者が	子どもが属するすべての集団において	学校で	いじめられたら	他の子どもが助けてくれないことが多い
3 傍観者・傍観者が	子どもが属するすべての集団において	学校で	いじめ行為を見られたら	相談しやすい環境にない (安心・安全など)
4 被害者が	子どもが属するすべての集団において	あらゆる場所	いじめ行為を見られたら	相談しやすい環境にない (安心・安全など)
5 傍観者・傍観者が	子どもが属するすべての集団において	学校で	いじめ行為を見られたら	4人に1人は被害者としてもらう/嫌をしない
6 傍観者が	子どもが属するすべての集団において	学校で	いじめ行為を見られたら	傍観者各派により、率先して行動に参画しない (他の誰か相談員ありとうとう)
7 傍観者が	子どもが属するすべての集団において	あらゆる場所	いじめ行為に気付いたら	見てみぬふりをしてしまう。(小学校高学年)
8 被害者が	子どもが属するすべての集団において	あらゆる場所	いじめられたら	相談することをあきらめてしまう。
9 傍観者・被害者が	子どもが属する学生集団において	学校で	いじめが起っても	あつしいと感じない 誰かから苦言がある (高学年)

Figure2 「現状」についてのワークシート (抜粋)

【「空気」】

【理由】
自由記述から見ると、怖いと空気が多いように感じる。仕返しの心配や人間関係の変化が心配⇒「怖い」。これを言っていないのかなという戸惑いや気まずいなどの感情⇒空気この複合のように感じました。その中でも、1つとなると、「空気」という言葉が適切かと思ったからです。

【記入者

【最も「声をあげにくい」・「声を受け止めにくい」にインパクトが大きいと思われる項目】
話しても解決ができないから

【理由】
話しても解決できない。ということが解決できれば、仕返しされる状態も解決できることになる。デメリットよりメリットが大幅に上回るため、相談することに価値を感じると思う。

【記入者

【最も「声をあげにくい」・「声を受け止めにくい」にインパクトが大きいと思われる項目】
不安だから

【理由】
声を上げられない理由として、傍観者・被害者ともに「次が自分になるかもしれない」「これ以上ひどくなるかもしれない」など、どれも自分が置かれる状況が悪くなることを不安に思っていると感じた。また、行動したところで好転するような成功体験があればよいが、その経験があまりにも少ない(ない)ため、不安を拭くことはできないと考える。

【記入者】

Figure3 「「声をあげにくい・受け止めにくい現状」に影響を与えている要素 (抜粋)

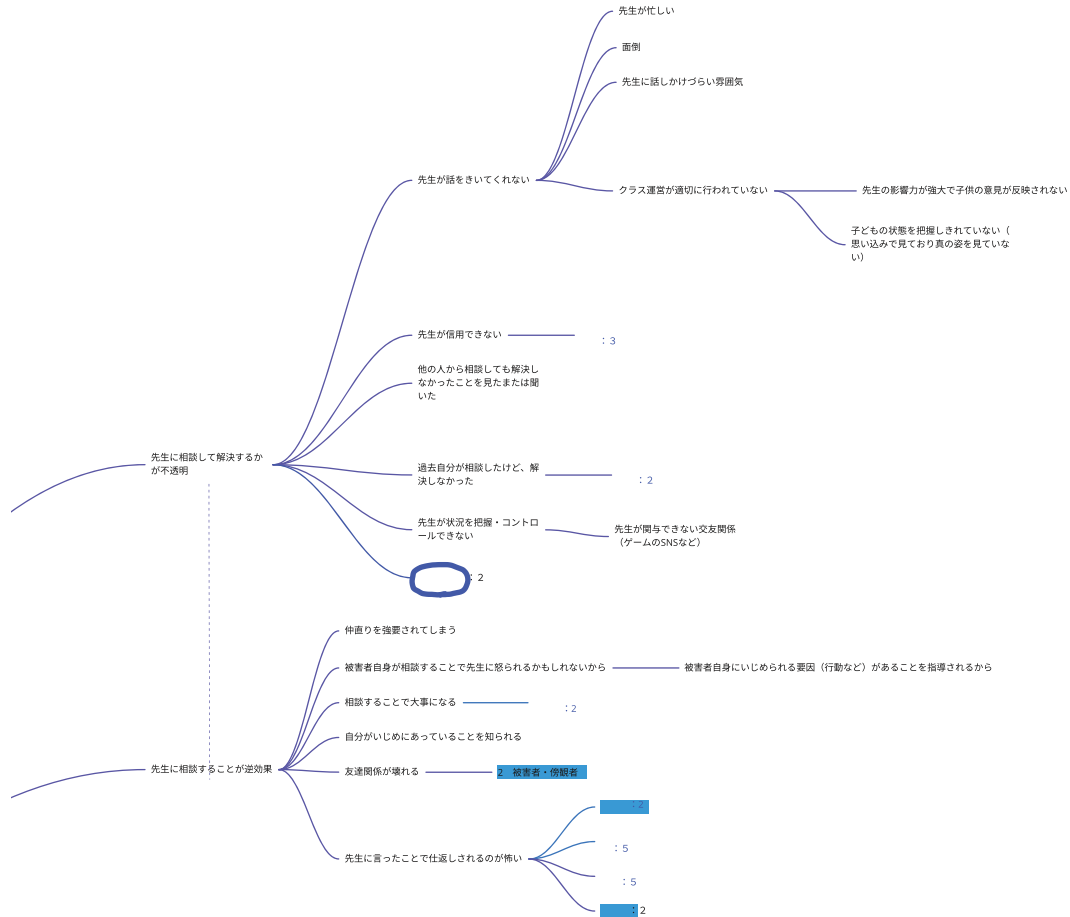


Figure 4 「被害者が不安だから先生に相談しにくい」から分岐した二つのノード (「なぜなぜ分析」結果からの抜粋, 参加者名は削除している)



Figure 5 根本原因「自分がいじめの対象になるから」に対する介入アイデアの例

控えたいが、当初筆者らが想定していたよりも多くのユニークなアイデアを得ることができた。また参加者らにとっても、いじめ問題について共同で掘り下げた考察し、長い時間をかけて対策を検討したことは大きな学びとなったようであった。今回のワークショップが、参加者全員にとって有意義な学びの機会になったと考える。

6. 考察

本実践は、コロナ禍においてやむなくオンラインでのワークショップ開催となった。一般的に、討論をする上では対面でお互いの顔や表情が直接見えて、息づかいや雰囲気把握できる環境下でディスカッションの方が円滑に討論を進められるため望ましいと考えられる。今回のオンラインワークショップでも、討論時に発言の「間合い」が把握しにくいと同時発言となったり、逆に互いに発言のタイミングを様子見してぎこちない討論になることもあった。一方で、対面のコミュニケーションだと立場や文脈、身分や年齢といった個人属性や、眼前にいる他者の存在感等の文脈的要素が大きく影響して、遠慮して言いたいことを言えなかったり、相手や周囲に忖度して議論が深まらなかったりすることも珍しくない。むしろ、オンライン上のコミュニケーションの方が、相手と直接繋がっている感覚が得られるため、場の雰囲気や他者の存在感等の文脈に左右されにくい。実際に大学のオンライン授業では、通常の対面授業の時よりも学生からの質問が増えるという声もある（文部科学省、2020）。対面およびオンラインそれぞれにおいてメリット、デメリットが想定されるが、今回のオンラインワークショップでは、参加者の積極性も手伝って、協働的なディスカッションができたと思われる。

また、オンラインホワイトボードツールである Miro は、討論の課題提示やアイデア生成のためのマインドマップ作成、および討論結果の共有・記録のために非常に有効であった。対面で実際のホワイトボードを使用してマインドマップを作成することはスペースに限りがあったり、手書き文字が読み取りにくい場合があったりする等のデメリットがある。また付箋を用いたブレインストーミングも同様のデメリットがあるが、Miro においてはこうしたデメリットが克服できる。Zoom と Miro の組み合わせによるオンラ

インでのワークショップであったからこそ、今回の実践では充実した検討会が実現できたと言える。

今後の課題としては、ワークショップに要する時間の削減や、参加者の作業負担の軽減が挙げられる。より効率的・計画的な運営によってこれらを改善することを今後検討したい。

付記

本論文執筆を第一筆者が担当し、ワークショップのファシリテーターを第二筆者が担当した。筆者全員がワークショップへの参加及び管理運営、本論文の考察を担当した。また全著者が最終稿を承認している。

利益相反自己申告

著者全員が利益相反はない。

謝辞

今回のワークショップに参加いただいた下記の皆様に謹んで感謝申し上げます。

井林洸太さん（宮城教育大学）

石井恵子さん、大友啓之さん、林智美さん、

星川真吾さん、菊池一真さん、鈴木大地さん、村山愛実さん（以上 宮城教育大学教職大学院）

鈴木理子さん、吉田桃子さん（以上 仙台市子供未来局いじめ対策推進室）

後藤健太さん、今野幹也さん（以上 東北インフォメーション・システムズ株式会社）

引用・参考文献等

本田真大 (2017) 「いじめに対する援助要請のカウンセリング」 金子書房

時事通信社 (2021) 「いじめ認知7年ぶり減 51万件、不登校は過去最多 - コロナ影響か・文科省」 JIJI.COM 2021年10月13日配信記事 <https://www.jiji.com/jc/article?k=2021101300848&g=soc> (2021年12月26日閲覧)

久保順也 (2016) 「児童生徒間のいじめに対する教員の認識: テキスト分析によるカテゴリ化の試み」 『宮城教育大学紀要』 Vol.50, pp.267-276

久保順也 (2018) 「なぜ子どもは自分のいじめ被害を隠すのか - 規範意識および友人認識との関連 -」 『宮城教育大学紀要』 Vol.52, pp.287-296

Miro (2021) ウェブサイト .<https://miro.com/> (2021年12月26日閲覧)

文部科学省 (2020) 「今後の国立大学法人等施設の整備充実に関する調査研究協力者会議 (第5回) 『コロナ対応の現状, 課題, 今後の方向性について』」
https://www.mext.go.jp/content/20200924-mxt_keikaku-000010097_3.pdf (2021年12月26日閲覧)

文部科学省 (2021) 「令和2年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する

調査結果について」 https://www.mext.go.jp/content/20211007-mxt_jidou01-100002753_1.pdf (2021年12月26日閲覧)

内閣官房 (2021) 「新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の区域変更」 https://corona.go.jp/news/pdf/kinkyujitaisengen_houkoku_20210825.pdf (2021年12月26日閲覧)

高橋知己・小沼豊 (2018) 「いじめから子どもを守る学校づくり」 図書文化社